

相互行為分析という視点:
文化と心の社会学的記述

概 要

西阪 仰
明治学院大学社会学部

1 本稿の基本的な主張

本稿では、一切の現象を相互行為的現象として再特定化すること、すなわち、一切の現象を、具体的な相互行為の展開のなかで、またそれをとおして達成・組織されものとしてとらえ直すこと、このことがこころみられる。ここには、弱い主張と強い主張が含まれる。つまり、一つは、こうすることが可能だという弱い主張であり、もう一つは、これが必要だという強い主張である。弱い主張は、そのまま擁護されなければならない。たほう、このようないき方が唯一可能ないき方であるというような主張を、ここでするつもりはない。が、このいき方が、それなりに、とるに値するものであることは、きちんと述べられなければならない。と同時に、このいき方は、それなりに完全なものであること（すなわち、他のいき方以上に不完全なものではないこと）も、積極的に主張される。

本稿は、ハロルド・ガーフィンケル (Harold Garfinkel)、ハーヴィ・サックス (Harvey Sacks)、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) の議論に負うところが大きい。

ちなみに、本稿は一貫して、エスノメソドロジー (ethnomethodology) および会話分析 (conversation analysis) と呼ばれる社会学の一流派の立場にたっている。しかしながら、エスノメソドロジーを、与えられた出発点とはしていない。むしろ、社会秩序という社会学の基本テーマにたいして、どうしてエスノメソドロジーの立場から接近する必要があるのかという点から、きちんと論を展開していくことが選ばれている。したがって、本論においては、「エスノメソドロジー」ということばは、あえて使用しないことにした。

2 本稿全体の展開

本稿は、あくまでも社会秩序をどうとらえるか、という問題をめぐるものである。最初に、なぜ相互行為かという点を明らかにするために、いくつかのパラドックスを検討することから始める。社会を個々人の集まりとして考えること（個々人の志向が重ね合わされたものと考えるにせよ、超越的な規範・規則により個々人が束ねられていると考えるにせよ）が、原理的な困難に絡め取られることを、まず（序章で）示したうえで、社会という領域が厳密な意味で人と人の「あいだ」にあること、すなわち、ひじょうに強い意味で相互行為的であることを、（とりわけ第1章で）示す。つまり、複数の参与者間の具体的なやりとりの実際の展開のあり方（この展開は、個々の参与者が本当のところ何を思っているかなどとは、まったく無関係である）として、社会秩序を再特定化することが提案される。

第二に、社会的現実を正確にとらえようとするならば、日常的な概念を、それが曖昧だからといって、「厳密な」概念へと修正してしまうのではなく、むしろ、日常概念が、たとえ「曖昧」であったとしても、それなりにどのような働きをしているかをみていく必要があるはずだ。従来、社会学は、まず日常概念を「厳密に」定義しなおすところから出発する。そこから、すべての事例を包括する一般的仮説が構築されるわけである。それにたいして、本稿の主張するいき方では、あくまでもその時々状況に応じて参与者たちが自分たちの概念をどうもちい、またそれによって何を成し遂げているかを、そのつどの事例にそくして記述していくことが目指される。このように、仮説の構築ではなく、個別事例の記述に徹していこうというのが、相互行為分析の基本的な態度である。

このような具体的な個別事例の記述は、まずは実際の会話の録音を

書き起こしたものにそくしておこなわれる。しかし、もちいる素材がいわゆる「対面的」相互行為に偏りがちであることは、偶然である。あるいは、あくまでも便宜上のことである。相互行為分析は、けっして対面的相互行為について何か一般的なことを論じようとしているわけではない。あくまでも、社会秩序を相互行為的現象として再特定化するにあたり、もっとも使いやすい素材にそくして、いかにして社会秩序が組織されるかを例示しているにすぎない。このような例示を重ねることで、社会秩序についての概観（Übersicht）をえること、これが相互行為分析の目的である。

相互行為分析は、いかにも、せいぜい社会の一部分しか扱えないかのような印象をあたえるかもしれない。本稿がおもに照準するのは、この点である。第一に、つうじょう個々の相互行為の外部にあると想定されていることがらも、相互行為的な現象として再特定化することができる。たとえば、一方で、文化の差異のような、いわゆる「マクロ的」な構造にかかわるようなものがあるし、他方で、感情や感覚など、個人の内部に閉ざされていると考えられているものもある。これらは、すべて、具体的な相互行為の実際の展開のなかで、その展開をとおして達成されるものとみることができるのだ。それだけではない。文化の差異などは、しばしば、観察された現象を説明するために説明変数として仮設されるだけで、それ自体が、それ自体として探究するに値する現象とみなされることは、じつはあまりないように思う。相互行為分析は、むしろ、つうじょう説明変数としてもちいられるだけのものを、積極的に対象化する文体を用意する。

第二に、個人の内面にある感覚など、どうしても相互行為に決定的に秘匿されているように思えるものがある。第3章では、とくに「わたしの感覚」なるものが、相互行為から閉ざされた、本人にだけ近づきうるものだという想定が、ある種の錯覚にもとづいていること、こ

のことが示される。つまり、相互行為分析に原理的に近づきえないものなど、じつはないのではないか、ということが示唆される。ただし、ここで主張されているのは、相互行為の外部がない、ということではない。むしろ、外部はある。そして、外部があるという事実の事実性は、それ自体相互行為的現象として再特定化できるのである。

最後に（第5章で）、本稿の心的現象にかんする議論をふまえて、従来社会学の方法論のなかでいつも問題になってきた「理解」と「解釈」ということが、相互行為的現象として再検討される。社会学の基本的な方法論的自己了解は、論理的もしくは概念的な誤謬に深く根ざしていることが、ここで示される。

3 各章の概要

序章（「社会という領域」）。最初に（第1節）、とくにクラーク（H. H. Clark）とマーシャル（C. R. Marshall）の提起した、いわゆる「相互知識のパラドックス」を手がかりにしながら、社会を、個々人の志向がなんらかのかたちで束ねられたものとして構想することの困難を示す。社会は、厳密な意味で人と人の「あいだ」にある。つぎに（第2節）、パーソンズ（T. Parsons）の社会秩序にかんする議論を検討する（とはいえ、ここではパーソンズの理論についての精確な検討をおこなうのではなく、むしろ、現在も社会学における基本的なアイデアとなっていることを、パーソンズにそくして扱うことになる）。3つのことがのべらる。第一に、パーソンズは、人間を社会の外部にあるものと位置づけたにもかかわらず（あるいは、むしろ、そうすることによって）、社会秩序の問題を、いぜん個々の主体の志向をいかに束ねるか、というかたちでたてていること。第二に、解答不能なかたちでたてられた問いに無理やり解答をあたえることから、けっきょ

く、（物理的秩序と区別される）社会秩序に固有な水準を取り逃がしてしまっていること。第三に、このことは、一定の認識論的態度と連動していること。すなわち、日常的な概念は「曖昧」だから、科学的営みにおいては、それを「厳密」な概念へと修正しなければならない、という態度があること。以上である。

第1章（「相互行為分析という方法」）。序章の議論をふまえて、具体的な相互行為に徹底的に内在すること、すなわち、具体的な相互行為のなかで日常的な概念がそのつどどのようにもちいられ、それをとおして何が成し遂げられているか、をつぶさに記述することが、提案される。最初に（第1節）、相互行為分析とはどのようにものであるかが、電話での数秒間のやりとりにそくして具体的に例示される。個々の発話は、いわばさまざまな事柄（たとえば、先行する発話をどのように受けとめたか、いま何が行なわれていると理解しているか、さらに先行する発話もしくは現在の発話で何が観察可能とされているか、など）を観察可能にする操作であり、相互行為はかかる操作の接続としてとらえられる。つまり、相互行為はたんなる（音声的）行動の刺激－反応的な連鎖ではなく、そのつど観察可能とされているものに観察可能なしかたでかわりゆくことの連続である。相互行為の秩序としての社会秩序は、このような操作の「パッチワーク」として局所的に達成される（第2節）。実際に相互行為分析をおこなうとき、なんらかの規範に言及せざるをえない。そこで、規範もしくは規則を（とりわけヴィトゲンシュタインの議論を手がかりにしながら）位置づけなおすことが、つぎに（第3節）ころみられる。そのさい、クリプキ（S. Kripke）の「規則にたいする懐疑主義」によって提起された問題を真摯に受け止めながらも、しかし、それに与することなく、むしろ、伝統的な規則観にかわる、規則にかんする一つの積極的な考え方

を提示する。規則は、けっして規則にしたがっておこなわれる行為を外部から拘束・制限するものではなく、あくまでも規則にしたがう実践のうちにあることが、示される。最後に（第4節）、相互行為分析があくまでも「経験的」研究であること、しかしながら、経験的一般化をめざすような研究とは根本的に異なることが、示される。

第2章（「『日本人である』ことをすること」）。この章は、サックスの「成員のカテゴリー分け（membership categorization）」にかんする議論を、「異文化性」ということにそくして展開するところみである。まず、いわゆる異文化間コミュニケーションにかんする「伝統的な」いき方（具体的には、ガンパーツ（J. J. Gumperz）、リーバーマン（K. Liberman）、エリクソン（F. Erickson）、シュルツ（J. Shulz）の研究が引用される）にたいして、若干の疑問を呈するところから、始める（第1節）。たいていの異文化間コミュニケーションの研究では、文化的アイデンティティを特徴づけるカテゴリーが、いわばパラメータとしてもちいられ、それを手がかりに、経験的な素材のなかに観察された現象が説明される。このとき、このカテゴリーが当該コミュニケーションにとってどのようなレリヴァンシー（その場でのふさわしさ、適切さ、関連性）をもつかは、ほとんど考慮されることがないように思う。この章では、日本における外国人留学生にたいするインタビュー番組（ラジオ）からいくつかの断片をとり、それを分析しながら、参与者たちがそれぞれ「日本人」および「外国人」であること（したがって、当該コミュニケーションが「異文化間の」であること）が、そのつどの相互行為のなかで相互行為の具体的な展開をとおして成し遂げられること、このことが示される。つまり、インタビュアーとゲストは、自分たちのふるまいを互いに調整しあいながら、それぞれレリヴァントなしかたで「日本人」および「外国人」であるこ

とおこない続けなければならないのである。かくして、つうじょうは所与のものとして仮定されている事柄（すなわち日本人であることなど）が、それ自体分析可能で探究可能な相互行為的現象であることが、同時に示される。

第3章（心の透明性と不透明性）。相互行為分析によって失われるものがなにもないこと、すなわち、相互行為分析は決して不完全ないき方ではないこと、このことが心という現象にそくして示される。心は相互行為にたいして徹底的に秘匿されているようにも思えるかもしれない。しかし、そもそも「心なるもの」がどこかにある、と仮定する必要はない。じっさい心が実際に言及されるとき、秘匿された「なにか」が指示され記述されるわけではない。心への言及の成否は、その記述としての真偽よりも、むしろ、その言及をとおしておこなわれる具体的な活動の成否に懸かっている。まず（第1節）このことを、（サックスの議論を敷衍しつつ）示しておいたうえで、つぎに（第2節）、心の秘匿性との関連でとりわけ問題になる、気分・感覚への一人称の言及を検討する。それをとおして、心が他者から原理的に閉ざされたものと考えたくなるのが、ある種の錯覚にもとづくものであること、このことが（ヴィトゲンシュタイン、オースティン(J. L. Austin)、ハッカー(P. M. S. Hacker)らの議論に依拠しつつ）示される。とくに「痛み」について「わたしだけが知っている」という言い方が、概念上の混乱にもとづくものであることが、「知る」の概念分析により明らかにされる。いっぽう、心が不透明なものとして立ち現われることもある。このことを否定する必要はない。むしろ、この事実の事実性が、一つの探究するに値する現象として扱われる（第3節）。心の秘匿性そのものが相互行為的に構成されるのである。つまり不透明な心も、それ自体一つの相互行為の形式なのである。

第4章（「相互行為的現象としての「見る」こと」）。（人間の）「見る」という現象を、皮膚界面下でおきる私的な過程から切り離し、相互行為の規範的秩序のなかに位置づけなおすこと、このことがこころみられる。つうじょう「見る」ことは、視覚印象なり網膜映像なりを「頭の中で」解釈する（もしくは概念的に加工する）ことにより達成されると考えられがちである。それにたいして最初に示されるのは（第1節）、見ることを解釈として考えるやり方が概念的な混乱にもとづいている、ということである。さらに第2節では、そもそも視覚印象もしくは視覚的体験一般は、見ることと本質的な関係がないことが示される。見ることをある種の解釈とみなす考え方では、しばしば、たとえば網膜上の映像に一定の概念が適用されることにより「見る」ことができるようになる、とみなされる。しかし、そもそも見ることにとって概念は必要でないことが、明らかにされる（第3節）。ついで、まず第4節で、見るのがかならず一定の社会的活動のなかに埋め込まれていることをのべたうえで、最後に（第5節）、相互行為の具体的な展開のなかで、見るのがどのように成し遂げられていくかが、例示される。子どもたちが協同でコンピュータ・ゲームをやっている場面からとられた十数秒間の断片が、詳細に分析される。この章はおもに、サックス、ヴィトゲンシュタインのほか、ギブソン（J. J. Gibson）、クルター（J. Coulter）、ケニー（A. Kenny）らの、視覚もしくは「見ること」にかんする議論に、依拠している。

第5章（「理解と解釈」）。社会学の伝統のなかで、しばしば「理解する」ということが、ある種の解釈として考えられてきたように思える。しかし、ここにも概念上の混乱がある。理解が解釈であると考えられるかぎり、理解はいつまでも生じえない。最初に（第1節）、

明らかに「解釈」をしている場面というものが、いかに特異なものであるかということ、そして、「理解」がいささかも、なにかをなにかとして解釈するという操作を含まないこと、このことが例にそくして実感的に示される。相手の思っていることを理解するときは、その人の内面の状態を推論する必要はない。むしろ相手の思いは、その人の語る事柄のうちに端的にみてとれる。ついで（第2節）、「理解」ということについて、概念的な分析がこころみられ、「理解」が、いかなる出来事・過程・状態でもないことが（ふたたびヴィトゲンシュタイン、クルター、サックス、ハッカーと、それにライル（G. Ryle）の議論を手がかりに）明らかにされる。「理解する」とは、むしろ、相互行為上の能力である。いっぽう、もちろん解釈がおこなわれることもある。第3節では、翻って、解釈するというものを、そのつど特殊な相互行為の展開に埋め込まれているものとして再吟味することが、こころみられる。たとえば、ラジオ・カウンセリングにおいて、司会者が相談者の「問題」を定式化するという実際上の目的のために、あるいは、留学生にインタビューをする司会者が、「日本人／留学生」という関係を維持するという実際上の目的のために、「解釈をする」ことをおこなっていく。以上から最後に（第4節）、「解釈する」ということは、行為論の前提におかれるべきではなく、むしろ、それ自体探究すべき相互行為的現象として扱われるべきことが、述べられる。

結語。相互行為分析と従来の社会学が、ガーフィンケルのいうところの「通訳不可能で非対称的代替関係にある」ことを示す。相互行為分析は、たとえば、従来の社会学と「マイクロ・マクロ」結合によって相補的になれる、などということはない。両者は、まったく異なるリアリティに照準している。